

しょうしんげ 「正信偈」のおはなし③

今年も春のお彼岸のお中日を迎えました。

暑さ寒さも彼岸まで、とありますが、お彼岸を過ぎると、これまでの寒さも和らぐといわれます。

お彼岸には太陽が真東から昇り真西に沈みます。

正信寺の本堂は真東を向いて建てられているので、今日のご本尊の阿弥陀様の真正面から日が昇り、真後ろに日が沈みます。

彼岸というのは「岸の彼方」と書きますが、この岸の彼方、向こう岸とは、仏さまのさとりの世界のことです。

真西へ沈む夕日に極楽浄土を重ね合わせて、西方浄土に向かって手を合わせ、後生の安楽を願うのがお彼岸です。

浄土三部経じょうどさんぶきょうのひとつ、『観無量寿経くわんむりょうじゆきょう』には「日想観にっそうかん」というものが説かれています。極楽浄土を想像するための方法のひとつとして、西に沈む夕日を見て心に極楽浄土を思い描き、浄土に生まれ変わることを願いました。

悩み苦しみや迷いにあふれたこの娑婆世界しゃば、この岸すなわち此岸しがんから、さとりの世界である彼岸へ到ることを願って、ご先祖様を敬い、亡くなった人を偲び、常日頃の自分を改めて見つめなおすのがお彼岸です。

さて、今日も「正信偈」の続きをお話ししたいと思います。

できれば今回は「依経段えきょうだん」の最後まで終えようかと思ったのですが、おそらく時間が足りないと思われますので、次回、お盆の時に「依経段」の最後までをお話ししようと思います。

能発一念喜愛心 不断煩惱得涅槃

〈よく一念喜愛心いちねんきあいしんを發せば、煩惱ぼんのうを断ぜずして、涅槃ねはんを得るなり。〉

「一念いちねん」は、信心が起こった最初の時という意味と、極めて短い時間、一瞬という意味があります

が、「一念喜愛心」とは、阿弥陀仏の本願による救済を喜び愛でる心のことです。

「涅槃」はサンスクリット語で「ニルヴァーナ」(nirvāṇa) といい、煩惱の迷いの火が吹き消えてなくなった状態、すなわち悟りの境地のことです。

人間が自分の力で煩惱を断つのは、とても大変なことです。私たちは、自分中心の自我のはからいを捨てるのが、なかなかできないのです。ですから、迷いの世界からは逃れることができません。しかし阿弥陀仏は、そういう私たちを哀れに思われて、本願をおこされました。

自分のはからい、自我執着心、我執に少しおとなしくしていてもらうことによって、阿弥陀如来の本願に素直にうなずけるようになるのです。そしてその本願を受け入れた信心の人は、煩惱を持ったままで、煩惱を離れた涅槃という境地に至るといふご利益に恵まれるのです。自分の力では煩惱を断つことができなくても、仏さまの力によって、煩惱を断ち切らないまま浄土でさとりを開くことができるというのです。

ここから「是人名分陀利華」までの十六句は、本願を信じることによって得られる五つのご利益について説かれています。

ご利益といっても、私たちがつい神仏にお頼みしがちな現世利益ではなく、どんな人も悟りを得ることができるというご利益です。

このような信心を起こしたときに、「不断煩惱得涅槃」すなわち、煩惱を断つことなく悟りを得られるというご利益に恵まれるのです。

ですから一番目のご利益は「不断得証の益」といい、自ら煩惱を断ち切らないまま、悟りを得ることができるというご利益です。

現代語訳は、以下の通りです。

《ふたごころなく（一念）信心をおこして阿弥陀仏の救いを喜び（喜愛心）なら、煩惱をなくさないまま、浄土でさとりを得ることができるのです。》

「凡聖逆謗齊廻入 如衆水入海一味」

ぼん しょう ぎやく ほう えにゆう しゆすい うみ い いちみ
〈凡・聖・逆・謗、ひとしく廻入すれば、衆水の海に入りて一味なるがごとし。〉

「凡」は煩惱にまみれた凡夫、「聖」は煩惱を滅し尽くした清らかな聖者、「逆」は五逆罪を犯した悪人、「謗」は仏法を謗る人のことです。

五逆罪とは、前回もご説明しましたが、

- ① 父を殺す（殺父）② 母を殺す（殺母）③ 阿羅漢を殺す（殺阿羅漢）④ 仏の身体を傷つけて出血させる（出仏身血）⑤ 教団の平和を乱す（破和合僧）の五つの重い罪の事です。

「廻入」とは、回心（廻心）して帰入することで、自分の思いにこだわり続ける心をひるがえして真実に目覚めること、自分のはからいを捨てて、真実に背を向けていた心をひるがえすことです。

こうした、凡夫や聖者、五逆や謗法といったどのような人々であっても、自分のはからいを捨てて、阿彌陀仏の本願を信じ喜べる信心の人は、阿彌陀仏の功德によって平等に救われるということ

を言ったのが、この部分です。
これを、きれいな川の水も濁った川の水も、どこから流れてきた川の水も、海に入ってしまうと同じひとつの塩味になるという例え話で表されたのが「如衆水入海一味」という一句です。

人はそれぞれ、生き方に違いがあります。人生それぞれ、いろいろです。
煩惱で心の濁った人は、人生という流れの中でいくらもがいても、自分の力で人生をきれいにすることはできません。

しかし海のように広い仏さまの世界に、濁ったまま、ありのままの自分を受け止めていただければじめて、きれいな水も濁った水もない、ひとつの海になるのです。
どのような現状や経歴であろうと、すべての人を救いたいという阿彌陀仏の願いの前では、何の区別もなく平等に救われるのです。

ただし、真実に背を向けたままの愚かな自分のままでいるのか、それともそのような自分にも阿彌陀仏の願いが向けられていることに気がついて、心をひるがえしてそれを喜ぶのか、というところに違いがあります。

親鸞聖人は、ご自分も濁った身であるにご自身を深く見つめられて、この「凡聖逆謗」という

言葉を使われたのです。

ですから二番目のご利益は、「平等一味の益」、すなわちどのような人でも平等に救われるという利益です。

現代語訳は以下の通りです。

《凡夫も聖者も五逆の悪人も仏法を謗る人も、みな本願海に入れば、川の水が海に入ると一つの味になるように、等しく救われるのです。》

「摂取心光常照護 已能雖破無明闇」

〈摂取の心光、常に照護したもう。すでによく無明の闇を破すといえども、〉

「摂取」は、おさめとる、迎えとることで、仏さまの光の中に衆生をおさめとることで。

『浄土和讃』には、次のような和讃があります。

「十方微塵世界の 念仏の衆生をみそなわし 摂取してすてざれば 阿弥陀となづけたてまつる」

《十方の数限りない世界の、念仏の人々をご覧になられて、摂め取って捨てられないから、「阿弥陀如来」と申し上げるのです》

微塵は細かい塵のことで、十方微塵世界とは、十方の微塵数の世界、無量無辺の世界のことです。摂取の摂はおさめとる、取は迎えとる、という意味だそうです。おさめ取って捨てないことです。

心光は智慧光・内光ともいい、仏さまの心から照らされる大慈悲心の光明で、信心の人だけを照らし、摂取して捨てないのです。

「無明闇」の「無明」とは、根源的な無知のことです。

お釈迦様も、一切の苦しみの原因は無明にあると説かれています。そして無明を滅すれば、苦悩を滅することができると言われました。

「無明」はサンスクリット語では「アヴィディヤー」(avidyā)といい、「真理に暗いこと」を意味

します。

すべての煩惱の根本、迷いの根源のことです。

このような境地を「無明の闇」「無明長夜」などと比喩的にいいます。

親鸞聖人は『正像末和讃』の中で、次のように詠われました。

「無明長夜の灯炬なり 智眼くらしとかなしむな 生死大海の船筏なり 罪障おもしとなげかざれ」《弥陀の本願は、煩惱の長い夜のともしびなのです。智慧の眼が闇いといって悲しむことはありません。本願は生死大海の船であり筏です。罪障が重いといって嘆くことはありません》

灯は普通のともしび、炬は大きなともしびで、これは阿弥陀仏の本願のことです。

阿弥陀仏の本願は無明の長い夜のともしびで、智慧の眼が暗いと悲しむことはないというのです。たとえこの身は無明の闇に沈んでいても、本願によって救われるということを言っています。

三番目のご利益は「心光摂護の益」すなわち、念仏の行者が阿弥陀仏の救いの光明にいつも摂めとられて護られるというご利益です。

光明は仏さまの智慧を象徴し、無知や迷いの闇を破り、真理を表すものです。

現代語訳は、以下の通りです。

《阿弥陀仏の攝取の光明は、常に私を照らしてお護りくださるのです。すでに無明の闇が晴れて救われた身になっても、》

「貪愛瞋憎之雲霧 常覆真實信心天」

〈貪愛・瞋憎の雲霧、常に真實信心の天を覆えり。〉

「貪愛」は「貪欲」ともいわれ、自分中心の欲望を追及して、あらゆるものを欲しがり執着する心です。

「瞋憎」は「瞋恚」ともいわれ、執着がかなえられず、自分の思い通りにいかなくて腹を立てた、

怒り憎しみの心です。このどちらも煩惱です。

三毒の煩惱といわれる三大煩惱は、^{とんよく}貪欲・^{しんに}瞋恚・^{ぐち}愚癡のことです。

私たち凡夫は、たとえ信心を得ても、亡くなる時まで煩惱から離れることができません。

天にたとえられている真実信心は、阿弥陀仏から授けられた、他力の信心です。

私たちは、自ら引き起こす「^{とんない}貪愛」や「^{しんぞう}瞋憎」によって、せっかくの「^{おお}真実の^{かく}信心」を覆い隠しているのですが、阿弥陀仏の大慈悲心の光は、それでも覆いつくせるものではないと、次のところで親鸞聖人は説かれているのです。

現代語訳は以下の通りです。

《^{むさぼ}貪り(貪愛)や^{いかに}瞋り・^{にく}憎しみの^{ほんのう}煩惱の^{こころ}心は^{くも}雲や^{きり}霧のように、^{つね}常に^{にょらい}如来から^{おほ}いただく^{しんじつ}真実の^{しんじん}信心
の^{そら}空を^{おほ}覆っているのです。》

「^{ひにょにっこう}譬如日光^{ふうんむ}覆雲霧 ^{うんむし}雲霧之下^{げみょうむあん}明無闇」

《たとえば^{にっこう}日光の^{うんむ}雲霧に^{おほ}覆われるれども、^{うんむ}雲霧の下^{したあき}明らかに^{やみ}して闇なきがごとし。》

ここでも例え話で、日光が煩惱の雲や霧に覆われてしまっているために私たちは日光を見ることができなくても、それでもやっぱり日光は明るく輝き続けているのだということを言っています。ですから雲や霧の下であっても決して暗闇ではなく、明るさは届いているのです。

阿弥陀仏の本願を受けて信心を得た人は、煩惱が往生のさまたげにならず、仏様の光明に照らされて、いつもおさめとられ、^{まも}護られる利益に恵まれることを示されています。

現代語訳は以下の通りです。

《たとえば^{にっこう}日光が^{くも}雲や^{きり}霧に^{おほ}覆われてさえ^{くも}ぎら^{きり}られても、^{した}雲や^{あか}霧の下は^{やみ}明るくて^{おな}闇がないのと同じなの
です。》

この続きは次回またお話ししたいと思います。以上で今日のお話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。